

## 4. この目で見て

### イ 北海道の草地

東北農試

高井 慎二

北海道の草地は、面積が広いために施肥量が少なく、その収量は非常に少ないものと、学会のエクスカージョンに参加するまでは思っていた。しかし、わたくしたちがみて回つた道東の草地は、この想像を見事にくつがえしてくれた。また、その草地に播かれている草種も、チモンシーとアカクローバが主体で、他の草種は育たないかのように聞いていたが、オーチャードグラスやラジノクローバもよく繁茂していて、あたかも東北の草地にでも立っているかのような錯覚さえ覚えたのである。

ただ、欲を云えば、これらの草種を含めた放牧用、採草用(サイレージ、乾草用)の、いくつかの草種組合せをつくり、これを計画的に使い分けることができたら、なお素晴らしいと思つた。

草の刈取回数は一般に少ないように感じられた。これにはいろいろな理由があると思われるが、少なくとも年3~4回刈取れば、さらに高い密度を採り得て、雑草の発生も抑えられるのではなからうか。

今後北海道でも経営規模の拡大あるいは集約化が行なわれ、家畜の多頭化が進められると思うが、7カ月にも及ぶ冬期の貯蔵飼料の確保問題は、ますます重要になるであろう。これを全面的に乾草調製に頼ることは、気候の面から難しいとすれば、当然サイレージによらざるを得ない。サイレージは、暖地に比べ、つくり易く、長期貯蔵も可能であろうと考えられるから、これをさらに強力に奨励、普及されるべきであろう。

現実には車窓からみた北海道の農家には、予想に反しサイロ基数が少ないようで、ちよつと意外であつた。

北海道でも、草地は山地帯にかなり多いように思われ、そこに使われているトラクタは一般に登はん力、牽引力、安定性が劣り、諸作業に無理があるようである。そこで、今後ゴムキヤタピラ式のようなトラクタの開発が必要になるのではなからうか。もしこれが可能になれば、積雪期の悪路にも威力を発揮できるものと思う。

昨今、北海道の草地利用農家の一戸当り面積は増加の傾向にあるという。これは経営規模拡大の面からみれば、よろこばしいことであるかも知れないが、これが他農家の離農によるものであるとすれば、その理由を明らかにしておく必要があるように思う。

最後に、北海道で食べた飯は、どこに原因があるかわからないが、美味しいと思つたことがなかつた。それにひきかえ、トウモロコシやバターをつけて食べた馬鈴薯の味はまた格別であつた。やがて、道内の米消費者間にも米質への関心が高まり、さらに青函トンネルの完成によつて、本州と地続きになり、流通関係が改善されれば、寒地での米作は、時局に便乗して云うわけではな

いが、今後多難のようである。

これに反し、広大な土地に恵まれ、その上で営まれる機械化草地農業こそ、今後北海道農業の進むべき方向ではなからるか。